

# 江戸のキリシタン屋敷

谷 真介著  
三吉 達絵



もくじ

はじめに 6

第一章 江戸キリシタンの迫害

三代将軍家光の登場 14

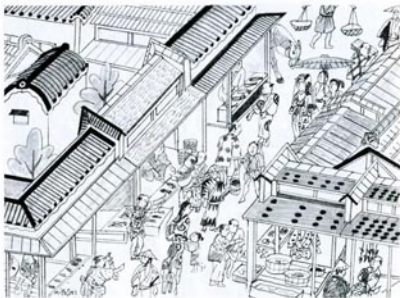
江戸のキリシタンの中心的人物たち

元和・江戸の大殉教 32

信仰のあげほの 41

秀吉の禁教令以後 48

22



## 第二章 殉教者と背教者

- 賞金つきキリシタン狩り 58  
キリシタン屋敷をつくった人 65  
キリシタンめあかしはもと神父  
先発隊につづく第二隊の運命 80  
信仰へのたちかえり 90

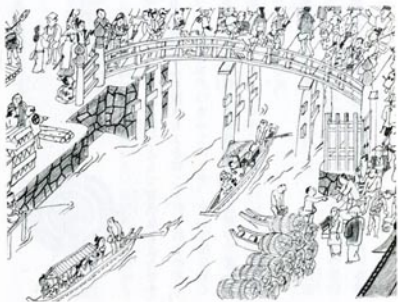
## 第三章 キリシタン屋敷の日々

- 不人気投票の成果 98  
「聖像が出てきた！」 106  
キャラと寿庵の「病死」 112  
神父が書き残した牢獄記 122  
「お犬様」と將軍綱吉 131



## 第四章 最後の伴天連

- シドッチ神父の日本上陸 144  
長崎から江戸へ 156  
新井白石との出会い 166  
捕らわれの日々 179  
神にいだかれた三人の魂 188  
おわりに 197  
あとがき 202



### 三代将軍家光の登場



江戸幕府の三代将軍家光は、幕府をひらいた徳川家康の孫です。

父親である二代将軍秀忠は、じぶんのあとをつぐ三代めの将軍として長男の家光ではなく、次男の忠長をつける考えを持っていましたが、家光は竹千代と呼ばれた子どもころから、父親より祖父の家康にかわいがられ、そのほからいで将軍となった人物です。そして、わが国に鎖国制度をしき、外国との交渉を断ちながら、二百数十年にわたってつづいた江戸幕府の基礎を確立した将軍として、知られるようになりました。

しかしキリスト教に対しては、父親の秀忠や家康よりもはるかにきびしい制度をつくってとりしまり、わが国キリシタンの根絶やしをはかった人物です。

その家光が江戸幕府の三代将軍の地位にいたのは十九歳、元和九年（一六三三年）八月のことでした。それから三か月もたたない十月、家光はじぶんの住む江戸で五十人ものキリシタン

を捕らえ、市中をひきまわしたうえ、全員を火あぶりの刑に処するという「元和・江戸の大殉教」をおこなっています。

江戸はじまって以来といわれるこの事件の起こる一年まえの九月のことです。幕府は「二十六聖人の殉教」の地として有名な長崎・西坂の丘の上の刑場で、信者たちのみせしめのため、外国人宣教師や三歳の幼児までふくむ五十五人のキリシタンを火あぶりの刑にする。「元和の大殉教」をおこなっていますが、天下の権力者の座にいた家光は、家康や秀忠の時代に出されてきたキリシタン禁教令を改めて全国に布告するとともに、

「キリシタンを、これまでのように仏教徒に改宗させて許すようなことはしない。捕らえて、ここごとく処刑してしまえ」

と、役人たちに命じ、いちだんとすさまじい弾圧にのり出したのです。

幼い子どもたちであろうと、年老いた老人であろうと、信者なら手かげんはしません。キリシタンをかくまったり、信者とは知らずに家や宿を貸しあたえたものたちまでも捕らえてきて処刑するという、徹底したとりしまりをおこないはじめたのです。

信教の自由が認められ、じぶんが正しいと信じる宗教を信仰することのできるわたしたちは、とても考えられないことですが、江戸幕府が全国に布告した最初の大きなキリシタン禁教

令は、一六一四年二月に家康と二代将軍秀忠によって出されたものです。

家康の側近のひとりであった崇伝という僧侶が、「夜明け一番鶏の声で筆を起し、日の出まへまで一気に書きあげた」といわれるこの時の禁教令は、

「キリシタン宗門は、商船で交易にくるのではなく、みだりに西洋の宗教をひろめ、わが国の宗教をまどわし、日本の政治まで改めさせて、じぶんたちのものにしようとしている。これは大きな災いのきざしである。だまってみがしているわけにはいかない。邪法をひろめようとするのがあれば、鼻をそぎ、足を切り、火あぶりの刑などに処する……」

というものです。そして、これまでわが国にきて布教していた外国の宣教師や、どうしてもキリスト教を棄てない高山右近たちをマカオやフィリピンのマニラに追放し、一般の信者たちを人里離れた未開の地などへ流刑にしたのでした。

この時の禁教令と追放によって幕府は、「将軍や役人のいうことはきかないが、神の教えなら忠実にしたがう」というやっかいもののキリシタンの処分も、いちだんらくしたと考えたのでした。しかし、その後も海外へ追放した宣教師たちがひそかに日本へたちもどって布教をつづけたら、役人たちに気づかれないように信仰を守りとおしている信者たちがたくさんいることを知ったのでした。

捕らえられた信者たちは、そのたびにキリスト教を棄てて仏教徒になることをきびしく責められていましたが、幕府では町のつじなどに高札（立て札）をかかげ、密告者には銀三十枚、百枚などという賞金まであたえて、信者や宣教師の発見につとめていたのです。

「銀三十枚」という賞金をいまの金額になおすと、やく四十万円になります。百枚というと、およそ百三十万円。これらの賞金の額は年を経るにつれてさらにあがられ、「外国人神父ひとりにつき銀五百枚」という金額にまでつりあげられていきました。密告者の賞金の額からみても、家光やそれ以後の幕府の将軍たちがいかにキリシタンたちをにくみ、きらっていたかわかるうというものです。

家光が将軍になった直後に起こった「元和・江戸の大殉教」も、じつはこうした賞金に目くらんだひとりの男の密告によって、端を発したものでした。

当時の江戸の南町奉行米津勘兵衛の前にまかり出て、

「おそれながら、もうしあげます……」

と、訴え出た男は、そのころ江戸のキリシタンの中心的人物であった原主水のむかしの家臣です。

この男は、とばくなどに手を出してだいぶお金に困っていたらしく、むかしせわになった主



人を訴えて大金をせしめようとしたのですが、欲の皮がつっぱりすぎて、むかしの主人ばかりか江戸にはふたりの伴天連(外国人宣教師)がひそんでいて、ひそかに布教活動をしていること、じぶんが調べあげてつくった五十人をこえる江戸のキリシタンの名前を記した名簿まで、奉行の前にさし出したのでした。

「わが江戸の町には、信者はともかく、キリシタン伴天連などはひとりもない」と信じきっていた奉行は、ふたりの神父がひそんで布教していると聞いて、顔色を変えました。そして、ただちにこのことを江戸城にいる老中に知らせました。

老中たちもおどろきましたが、この話を聞いて心の底から怒ったのは、將軍になったばかり

の家光でした。

「日本国中が子(じぶん)のことにそむいて争いを起こしたとしてもおどろかぬが、子のひざもとにふたりの伴天連がひそんでいたとは、なにごだ。その方たちは去年の殉教(長崎の元和の大殉教)以後、どこにも伴天連は残っておらぬといったではないか。もうその方たちのいうことなど、信じぬ。もっとおおぜいのむほん人がおるにちがいない。長崎にはまだ二十人の伴天連がおるかもしれぬが、これはまだたいしたことではない。しかし、將軍のいる都にふたりの伴天連がおるとは、けしからん。かまわぬから殿罰にせよ。あとから出てきたやつも、みな同じ刑罰にせよ」

家光は老中たちを前にして、いらいちをかくしきれないようでした。

一方、江戸の町々へくり出していった奉行所の捕り手たちは、名簿に名のあるキリシタンたちをつぎつぎと捕らえ、日本橋の小伝馬町の牢へひきたてるとともにきびしく責めあげて、ふたりの神父のかくれが聞きだそうとしました。しかし、キリシタンたちはだれも口がからなく、なかなか行方がわかりません。

ところが、原主水はすぐに捕らえられてしまったのです。

そのころ浅草の鳥越に、家族からもみはなされて路上に捨てられた重病人や、世間からみ捨

てられた貧しい人たちが集落のようなものをつくって生活をしていました。ここには、一六八四年の禁教令が出されるまで、フランシスコ会の神父たちがつくった教会とハンセン病の患者を収容する病院があったのですが、それもとりこわされてしまい、ゆきばのない人たちが残されていたのです。

原主水はこうした人たちとともに生活をしながら、熱心に布教活動をつづけているところを捕り手の役人たちに捕らえられたのです。しかし、役人たちは主水のすがたをみて、

「この男が、ほんとうに江戸のキリシタンの指導的な地位にいるものなのだろうか？」と、びっくりしました。

ぼろぼろの衣服をまとっていたからでは、ありません。

なんと、原主水はひたいに十字の焼き印をおされ、手足の指と足の踵を切られていて、ほとんど立って歩くことができないのでした。しかし、名を問うと、おちついた声のみずから原主水と名のるのでした。役人たちはまるで大きなぼろをかつくぐようにして、とにかくこの男を奉行所へつれていきました。

こうして、原主人はなんなく捕らえたものの、ふたりの伴天連、イニス会の新エロニモ・デ・アンジェリス神父と、フランシスコ会のフランシスコ・ガルベス神父のふたりの行方は、

なかなかわかりませんでした。

奉行所では捕らえた信者たちをなおきびしく責めて、そのかくれがをつきとめようとまなこになつていましたが、やがてアンジェリス神父は自首し、ガルベス神父も鎌倉で捕らえられ、日本橋の小伝馬町の牢へひきたてられていきました。

老中から報告を受けた家光は、

「今後、ふたたびこうした失態のないよう、このさいいっそう詮議をきびしくして、キリシタンの根を断ち切つてしまえ。そしてこんど捕らえた者は、城下八百八町ぜんぶの町をひきまわして、ここごとく火あぶりの極刑にしてしまえ。」

ことに、原主水はつきやつ、予の知りあいとて、けつして宥赦（ゆるさ）てかげんすること）はしない。馬に乗せ、先頭に立ててひきまわし、大御所様（家光）の直臣、現公方（家老）の縁者なりとでも、かくのごとし。もつてお上（幕府）がいかにキリシタンをにくむかを知るべし」と、江戸中をふれ歩くべし……」

と、いいなつたのです。

家光は原主水のことを、じぶんの縁者のようにいってにくしみをのらせました。それはかつて、主水がじぶんの敬愛してやまない祖父家康のもっとも近くにつかえていた直臣だったか

らでしよう。家光は、

「生きるも 死ぬるも 何事もみな 大権現(家康)様らしい……」

と書いた紙片をお守り袋のなかへ入れて、はだ身から離さなかつたというほど祖父の家康を尊敬してました。ですから、原主水には承服できないにくしみをおぼえたのかもしれない。それにしても、浅草で捕らえられた時、原主水の風体はあまりにもいたましいものがありました。

原主水は、いったいなにをしたというのでしよう。どのような罪を得て、ひたいに十字の鍍金印をおされるといふようなすさまじい罰を受けたのでしよう。当時の江戸のキリシタンたちの中心的な地位にいた家康のむかしの直臣、原主水とはどのような人物だったのでしようか。

### 江戸キリシタンの中心的人物たち



原主水のことを記すまえに、当時の江戸のキリシタンたちの心のささえてあったアンジェリ

ス神父とガルベス神父のことに、ふれておきましょう。

ジェロニモ・デ・アンジェリス神父はイタリアのシシリ島に生まれ、三十四歳の時わが国にやってきてから、二十年一日のごとく献身的・精力的な布教活動をつづけ、当時の信者たちから「天使のジェロニモ」とたたえられていたイエズス会の神父です。

一六一四年、禁教令が出されて外国人宣教師たちの海外追放がきまつた時、アンジェリス神父はほかの神父たちとひそかにわが国にとどまり、生涯を日本人信者のためにささげようと決心したのでした。そして京都や大阪にいた七十人ほどのキリシタンたちが津軽の高岡(青森県弘前市)へ流刑になり、寒さのきびしい未開の地で農夫となって苦しい生活をはじめると、神父は日本人に変装し、役人にもつからないようけわしい東北の山々をこえて流刑地に入り、信者たちと生活をともにしたのでした。

さらに神父は、津軽藩から海を経てえぞ地(北海道)へ流されたキリシタンたちのことを聞くと、ヨーロッパ人としてはじめて北の海をこえてえぞ地に入り、金山の坑夫などをしながら信仰を守りとおしている信者たちをみまったり、佐渡、秋田、仙台など東北地方を歩き、この地方の布教につくしたのでした。

日本人に変装しているとはいえ、たえず役人の目を気にしながらの旅です。雪におおわれ、